

# 漢詩の口語訳に使われた世代をつなぐための外来語

—武部利男の漢詩訳の場合—

塚本 泰造

## Loanwords for Connecting Generations in Japanese Translation of Chinese Poetry

— In the case of Toshio Takebe's Colloquial Translation —

Taizo TSUKAMOTO

### はじめに

小論が対象とすることばは、古典の訳という制約にもかかわらず、あえて使われた外来語である。この外来語の採用は時代の動きにどの程度応じたものであったのか。

現代日本語の特徴の一つに、漢語に代わって、語彙拡張の担い手として外来語が飛躍的に増加していることが挙げられる(石井 2008)。そしてその増加のかげに気づかれにくい形で、外来語の基本語化が起きていることが指摘されている(金 2011)。その基本語化とは、従来は語彙体系の周辺部に位置していた外来語が語彙の中心部に移り、一定の言語使用領域において広く多く使われる語彙となってきたことを指す。その外来語の基本化は抽象的な語彙に多く見られ、新聞語彙においては類義の和語や漢語にない広範囲の意味をカバーできる「トラブル」、独自の意味領域を持つに至った「ケース」が発見されている(金 2011)。

こうした新しい傾向は、これまでの外来語研究に見られた外来語観や研究の姿勢について再考を迫っている。それは、言語文化的研究に見られた、周辺的なよそものとしての外来語ではなく、これからの基本語彙を担う重要な要素として外来語を捉えることである。

一方で言語コミュニケーションの観点からは、外来語はコミュニケーションの障害につながるものとして、特に外来語弱者に対する外来語使用の研究と提言がなされている(陣内 2007、2012)。しかし、外来語の基本語化が進んでいる状況からすれば、コミュニケーション上のマイナス面に多く焦点を当てていくのは偏った態度につながりはしないだろうか。

樺島(2004)は早くから外来語の基本語化の流れを指摘し、「借用語の第二次日本語占領」を招いて日本語を使う人々が不幸な状態にならないために、生活の中に浸透している外来語に対しても対策が必要であり、外来語の選別とチェック体制が必要であると述べている。そのためにも、多くの外来語の中で、コミュニケーション上有益なものは何かまたその目安を発見することも求められるだろう。

本稿は、こうした外来語のコミュニケーション上のプラス面を発見するために、若い世代に対して、年長の世代が何かを伝える言語使用・実践領域を対象とする。もし年長の世代が若い世

代に古典の内容を伝えるのであれば、外来語の増加と基本語化の中で育ってきた世代に対して、わかりやすいそして適切な外来語を活用する場面が多くなることが予想される。その中で古典を次世代へ伝えるための実践の一つである、漢詩の現代語訳の日本語において有効に使われている外来語は何かに焦点を当てる。

もちろん、相島宏氏の中国詩詞翻訳索引に見られるように、漢詩の現代語訳は膨大な量があり、その現代語訳の対象を絞り込むことが求められる。本稿では武部利男の漢詩訳の日本語に注目し、その中の外来語使用を具体的に解明することを目的とする。漢詩の訳に外来語を使うことは抑制されるのが常態であろう。その圧力にもかかわらず使用されている外来語があるとすれば、それはかなりコミュニケーション上有効な外来語である可能性が高い。そして武部利男の漢詩訳は、結局は以下の問題意識をもとにして、わかりやすさを最上位の優先事項として、二種の口語訳のあり方を実践するものだったと言えるのである（武部 1961: 200）<sup>注1</sup>。

中国の古典詩を現代の日本人、とくに若い人々にどのようにして伝えるかという問題の解決は、いまやわれわれに与えられた仕事の重要な一つである。

そこで古典の内容を次世代に伝えるために、第一歩としては、まずどのような外来語が実際に使われていたかを具体的に明らかにすることが求められるのである。

## 1、武部利男の訳業について

武部利男は 1925 年に生まれ、1981 年に没した中国文学者である。福井大学教授、立命館大学教授を歴任し、李白の研究と白楽天の口語訳では定評がある。特に後者は同人誌『VIKING』に中断を挟みながら連載されたものが単行本化されて、話題になったものである。恩師吉川幸次郎、倉石武四郎だけでなく小川環樹、富士正晴、笈文生など先輩同僚からもその文才は高く評価されているが、以下に引用する一海知義（1998: 413）の文章がその仕事を的確に伝えるものだろう。

武部さんは詩人である。

おだやかな『言葉の魔術師』だった。

武部さんが紡ぎ出す言葉は、決して鬼面人を驚かしたり、奇想天外なものではなかったが、時に人の意表を衝く。

李白が先輩孟浩然をたたえた詩「孟後年に贈る」に、

吾は愛す 孟夫子

という句がある。武部さんはこれを、

わたしは孟先生のファンである。

と訳した（『李白』、一九七二年、筑摩書房刊『世界古典文学全集』第 27 巻）。

私はそれを読んで、武部さんのファンになってしまった。

さらに仮名ばかりで訳した『白楽天詩集』を読み、一層武部ファンになり、書評に、訳が詩になっており、しかも正確で過不足がないことを激賞している。

一方、白楽天の詩集の評価については多くの人々が言及しているが、李白の詩の訳について具体的な箇所を引いて評価しているのは一海（1998）だけのようなのである。ただし後で示すように、武部利男が「ファン」と訳したのは1972年が最初ではない。評価は高いけれども、具体的な日本語の工夫の解明は、まだよくなされていないというのが現状であろう。特に外来語に着目した分析は皆無である。

本稿では、古典を次世代へ伝える一つの試みの中で、武部利男の定評ある訳業を第一歩として、外来語に注目するものである。合わせて「ファン」という外来語使用の客観的評価がどこまで可能かも考察する。

## 2、武部利男が漢詩訳で使用した外来語

武部利男の漢詩訳の調査対象として、以下の9冊の単行本に見られる漢詩の訳文を調査した<sup>注2</sup>。

- ・ 武部（1955）『李白小伝』新潮社
- ・ 武部（1957a）『白楽天詩集』東京創元社
- ・ 武部（1957b）『中国詩人選集7 李白上』岩波書店
- ・ 武部（1958）『中国詩人選集8 李白下』岩波書店
- ・ 高木正一・武部利男・高橋和巳（1962）『漢詩鑑賞入門』創元社
- ・ 武部（1972）『世界古典文学全集27 李白』筑摩書房
- ・ 武部（1973）『中国詩文選14 李白』筑摩書房
- ・ 武部（1981）『白楽天詩集』六興出版
- ・ 武部（1998）『白楽天詩集』平凡社

これらの単行本中に見られる漢詩の訳文の中で、本稿が対象とする訳語としての外来語とは、固有名詞、例えば、人名（「ト・ホ」など）や国名（「トウ」「イラン」など）・地名（「テンダイサン」など）などのカタカナ表記の外来語を除いたもの全てである。固有名においては意味を考えて訳をするということには直接つながらないと判断したからである。

なお、西村（1982）では、同人誌『VIKING』の連載から単行本になるにあたって、訳文の改変がなされているという貴重な指摘がなされている。ただ、今回は、次世代へ古典を伝えるために、どのような外来語が具体的に使用されているかにまず楫を入れることが目的である。本文生成のプロセスから見た考察は行わない。

さて、調査の結果、具体的にどのような外来語を武部利男が漢詩の訳に使っていたかを以下の表1に示す。（ ）内は、右側に原詩において直接対応する語句、左側の数字は使用回数であり、無記は1例という意味である。

この結果から、武部利男は、3人の詩人の漢詩の訳に、異なり数で26語、延べ数で58語の外来語を使用したことがわかる<sup>注3</sup>。

## 3、李白の詩の訳における外来語の動向

前節では、武部が李白と白楽天および王之涣（1首）の漢詩訳に使った外来語は、異なりで

全て 26 語であることを示した。

しかし、李白と白楽天とでは、漢詩の訳し方が違う（武部 1980: 笥 1981: 蔭山 2014）。白楽天の詩の訳では、その言葉のやさしさを生かすべく、かなの分かち書きという表記上の強い制約に加え、五言一行を五七調一句に、七言一行を七五調二句に訳すという原則を課している。

表1 武部利男が漢詩訳に使った外来語一覧(固有名詞に使われたものは除く)

| 李白の詩                | 白楽天の詩         | 王之涣の詩   |
|---------------------|---------------|---------|
| インスピレーション (興)       | ガス(3, 瘴烟・瘴煙)  | メートル(仞) |
| ヴェランダ (2, 楹)        | スタイル(3, 體・遺風) |         |
| エクス (精)             | テーマ(目)        |         |
| エネルギー (4, 氣)        | パーティ(賓筵)      |         |
| カーテン (9, 紗・帷)       |               |         |
| クライマックス (酣)         |               |         |
| グループ (2, 倫)         |               |         |
| ゲーム (3, なし)         |               |         |
| コンクール (なし)          |               |         |
| スマート (2, なし)        |               |         |
| ドライブ (なし)           |               |         |
| バー(「酒場」のルビ) (酒肆)    |               |         |
| ハンカチ (5, 巾)         |               |         |
| ピン (簪)              |               |         |
| ファシズム (なし)          |               |         |
| ファン (3, なし)         |               |         |
| ベッド (3, 牀)          |               |         |
| ボーイ (2, 奴子)         |               |         |
| ポンプ (渴鳥)            |               |         |
| メロディ, メロディー (3, なし) |               |         |
| ロープ (2, なし)         |               |         |

つまり、読者にわかりやすくするために原詩にない部分を補う余地が少ないのである。以下に典型例を示す。

盡日松下坐 まつの した ひねもす すわり  
 有時池畔行 いけの はた ときたま あるく  
 (「詠懐 おもいを うたう」より)

在天願作比翼鳥 てんへ いくなら とりと なり  
 つばさを つらねて とびたいね  
 (「長恨歌 ながい うらみの うた」より)

李白の詩の訳と違って、こうした制約のもとで選ばれたカタカナ表記の外来語4語「ガス」「スタイル」「テーマ」「パーティ」は、かなりの吟味を経た上で使われた、揺るぎのないものと判断してよいだろう<sup>注4</sup>。

一方、李白の詩の訳の場合は、外来語の使用に変動がある。大まかに言えば、外来語の使用を制限する方向に訳し方を変えたと判断できるのである<sup>注5</sup>。以下に同じ詩の訳について、武部(1957b)(1958)と武部(1972)を対照した結果を示す。語の後の数字は該当ページ数である。

|                   |           |
|-------------------|-----------|
| 武部 (1957b)        | 武部 (1972) |
| ヴェランダ 28          | ヴェランダ 393 |
| ハンカチ 79           | ハンカチ 397  |
| ファン 83            | ファン 333   |
| インスピレーション 114     | 詩興 349    |
| グループ 167          | グループ 404  |
| スマート (な足の早い馬) 177 | 駿馬 259    |
| 武部 (1958)         | 武部 (1972) |
| ゲーム 40            | ゲーム 76    |
| カーテン 42           | カーテン 81   |
| カーテン 56           | カーテン 98   |
| エネルギー 63          | エネルギー 115 |
| ベッド 82            | ベッド 160   |
| コンクール 105         | × 201     |
| カーテン 109          | カーテン 203  |
| ロープ 118           | ロープ 225   |
| メロディ 118          | × 225     |
| ベッド 121           | 寝台 238    |
| カーテン 122          | とぼり 245   |

下線を引いた対応関係は、外来語使用が後になっておよそ14、5年後に消失した形になったものである。漢詩の訳において外来語を使うことを抑制していることがうかがえる。

なお、武部(1958)121ページの「ベッド」は有名な詩「静夜思」の「牀」の訳語である。武部(1968)ではこの詩における詩人の動作と心情に関して、諸説の考察とともに西洋のベッドとは違うものだとする吉川幸次郎の説を評価している。さらに丁(2012)によれば、この詩の「牀」はベッドではなく、「井戸囲み」(井床)と解釈する説があり、その解釈の方が有力であるという。その当時の注釈の状況から、少なくとも西洋風の「ベッド」ではないという判断が「寝台」という漢語に落ち着かせたと思われる。

また、同じ武部(1958)122ページでの「カーテン」については、この原詩だけ「羅紗」である。「うすぎぬのとぼり」の方がより正確にイメージ伝わると判断し、一律に「カーテン」と訳さなかった可能性があるだろう。

武部(1972)において、新たに付け加わった外来語は「ポンプ」(p. 89)「ピン」(p. 250)「ボーイ」(p. 282)の3語である<sup>注6</sup>。したがって、この3語を加え、1950年代からの漢詩の訳業において、後年外来語の使用を抑制しようとした中で、それでも使われた以下の12語を武部利男が確信

を持って使用した、手堅い訳語としておく。

ヴェランダ エネルギー カーテン グループ ゲーム ハンカチ ファン ベッド  
ボーイ ロープ ピン ポンプ

#### 4、「ファン」の使用をめぐって

武部の使用した外来語には、原詩に直接対応する部分が見当たらないものがある。全て李白の詩の訳の場合であって、全 11 ケースである。この 11 ケースの中に、一海友義が激賞する訳語「ファン」が見られるのである。原詩に直接対応する語句がないにも関わらず、外来語を使用した用法を整理したものを表 2 に示す。

表2 原詩の語句に間接的に対応している外来語

| 番号 | 訳に使われた外来語                                 | 原詩の間接的対応語句                 | 用法                               | 詩の題                        | 年                    | 該当ページ            |
|----|---|----------------------------|----------------------------------|----------------------------|----------------------|------------------|
| 1  | メロディー                                     | (凄清)                       | 被修飾成分の補い                         | 自代内贈                       | 1955                 | 222              |
| 2  | ドライブ                                      |                            | 行間の補い                            | 子夜呉歌                       | 1955                 | 232              |
| 3  | ファシズム (の)                                 | (天地)                       | 修飾成分の補い                          | 下邳の圯橋を経て                   | 1955                 | 246              |
| 4  | メロディー                                     | (此)                        | 指示代名詞の内容の補い                      | 秋巴陵に登り                     | 1955                 | 268              |
| 5  | (宮中美人) コンクール                              | (宮中)                       | 被修飾成分の補い                         | 宮中行楽詞 其の二                  | 1958                 | 105              |
| 6  | (の投壺の) ゲーム (を)                            | (玉女を)                      | 被修飾成分の補い                         | 短歌行                        | 1972                 | 219              |
| 7  | (その) メロディ<br>(その) メロディ                    | (唄うれば心摧けて)<br>(唄うれば心摧けて)   | 動作の成分の補い<br>動作の成分の補い             | 丁督護の歌<br>丁都護の歌             | 1955<br>1958         | 24<br>118        |
| 8  | スマート (なよい馬)<br>スマート (な足の早い馬)              | (駿馬)<br>(駿馬)               | 修飾成分の補い<br>修飾成分の補い               | 襄陽の歌<br>襄陽の歌               | 1955<br>1957         | 166<br>177       |
| 9  | (の) ゲーム (をやって)<br>(の) ゲーム (をやって)          | (投壺して)<br>(投壺して)           | 被修飾成分の補い<br>被修飾成分の補い             | 梁甫吟<br>梁甫の歌                | 1958<br>1972         | 40<br>76         |
| 10 | ロープ (をつけて )<br>ロープ ( で )<br>ロープ ( で )     | ( 拖く )<br>( 拖く )<br>( 拖く ) | 動作の成分の補い<br>動作の成分の補い<br>動作の成分の補い | 丁督護の歌<br>丁都護の歌<br>丁都護の歌    | 1955<br>1958<br>1972 | 24<br>118<br>225 |
| 11 | ファン ( である )<br>ファン ( である )<br>ファン ( である ) | ( 愛す )<br>( 愛す )<br>( 愛す ) | 述語の言い換え<br>述語の言い換え<br>述語の言い換え    | 孟浩然に贈る<br>孟浩然に贈る<br>孟浩然に贈る | 1957<br>1972<br>1973 | 83<br>333<br>22  |

\*同一の詩で複数回現れているものを後半に置いて、経年的に外来語の用法を把握できるようにした。

\*なお、ケース7「丁都護の歌」では1972の李白の詩の訳では、「メロディ」は使われず、補いそのものがない。

この表から、全 11 ケースのうち 10 ケースは原詩の語句に不足している情報を、成分や行間など何らかの形で補う時に、外来語が選ばれたものであることが分かる。

一方、ケース 11 の「孟浩然に贈る」では、武部は、外来語を語句の補いの一部としてではなく、「愛す」という述語全体の言い換えに使っている。他の 10 ケースとは異なった、示差的な、外来語の使用なのである。例えば、その (作品ではなく人を)「愛す」をそのまま「愛する」「好きである」「慕っている」と訳した場合、恋愛感情が日本語の方に含まれる。「好ましく思っている」では評価する側が上位に立つ読みもありえる。こうした訳の難所に対して、和語・漢語よりは語の歴史が浅く、中立的な意味合いを持つ外来語が選ばれたわけである。

もちろん、当時「ファン」以外の外来語の候補がなかったかどうか検討の余地はある。しかしながら、1957 年の単行本においてはじめて訳語「ファン」を選んで以降、武部は一貫して「吾は愛す 孟夫子」を「わたくしは (1972・1973 では「わたしは」) 孟先生のファンである。」

と訳していることが分かる。この外来語の使用は、15年以上揺るがなかった、いわば最適解の選択であったことも分かるのである。

## 5、外来語の基本語化の中で

最後に、漢詩訳に使われたこれらの外来語の26語がどの程度、基本語化の流れに応じていたか、金（2011）を参考に検証する。

まず、抽象的な語彙の基本語化が見られるかどうかである。『分類語彙表 増補改訂版』の意味分類にしたがって分類した結果を表3に示す。

表3 『分類語彙表』に基づく意味分類

| 抽象的關係   | 体の類     |              |          |             | 用の類     | 相の類 |
|---------|---------|--------------|----------|-------------|---------|-----|
|         | 人間活動の主体 | 人間活動-精神および行為 | 生産物および用具 | 自然物および自然現象  | 精神および行為 |     |
| エクス     | グループ    | インスピレーション    | ヴェランダ    | エネルギー       | スマート    |     |
| クライマックス | バー      | ゲーム          | カーテン     | メロディ, メロディー |         |     |
| スタイル    | ファン     | コンクール        | ハンカチ     | ガス          |         |     |
| メートル    | ボーイ     | ドライブ         | ピン       |             |         |     |
|         |         | ファシズム        | ベッド      |             |         |     |
|         |         | テーマ          | ポンプ      |             |         |     |
|         |         | パーティ         | ロープ      |             |         |     |

体の類において抽象的な語彙に相当するのは、「抽象的關係」と「人間活動-精神および行為」である。したがって、「エクス」「クライマックス」「スタイル」「メートル」および「インスピレーション」「ゲーム」「コンクール」「ドライブ」「ファシズム」「テーマ」「パーティ」がこれに該当する。また、相の類にも「スマート」が見られる。

次に、金（2011）の増加傾向係数の区分とデータに従ってこれらを分類する<sup>注7</sup>。下線を施したものは抽象的な語彙である。

u

- 区分1（増加） +15～+8 テーマ
- 区分2（やや増加） +7～+3 グループ、ゲーム、ドライブ、ロープ、ガス、スタイル
- 区分3（変化なし） +2～-2 エネルギー、コンクール、バー、ファン、ポンプ、メートル
- 区分4（やや減少） -3～-7 ベッド、パーティ
- 区分5（減少） -8～-15

金（2011）の外来語701語のリストにないものは以下の11語である。

インスピレーション、エクス、ヴェランダ、カーテン、クライマックス、スマート、ハンカチ、ピン、ファシズム、ボーイ、メロディ（ー）

この結果からは、漢詩訳という言語使用領域は外来語の使用になじまないと想定されるものの、それでも抽象語彙の基本語化という動きが4語見られたということになる。一方、リスト外の語が約42%（26語中11語）、増加傾向の見えない8語を加えると約73%である。全体としては、新聞語彙において周辺部に占める外来語が多く使われていることになる<sup>注8</sup>。つまり、7割は外来語の増加傾向の流れに乗って使われたものではないと予想できる。そして全体の流れに流されなかったかと思われる語の中に「ファン」も含まれているわけである。

ただし、一個人のこういった外来語使用傾向が、漢詩訳において大勢に属していたのか、それとも時代の先端を行くものであったかどうか等は、同じ時代の他の漢詩訳実践者、そしてそれ以前の実践者の日本語と比べてみなければ、確実なことは言えない。

## 終わりに

以上、五節にわたって、漢詩訳という古典理解のための言語使用または実践領域において、コミュニケーション上有効な外来語にはどのようなものがあるかを明らかにするために、定評ある口語訳の著者である武部利男に焦点を当てて考察してきた。

その結果、武部利男が使った外来語として、異なりで26語（表1）、そしてより厳しい吟味の上で確信を持って使用（継続）された外来語として、李白の詩の訳の場合は、「ヴェランダ」以下12語を得た。

また、より厳しく吟味されたと判断できる白楽天の詩の訳の場合は、「ガス」以下4語を得た。

そして一貫して訳語として使われている「ファン」について、その外来語使用が創発的なものであることをできるだけ客観的に証明することを試みた。この外来語「ファン」は、原詩に該当する語句ない中で、適切な漢語や和語がない中で、積極的に言い換え語句として選ばれたものであろうと推測した。

また、これら26語を外来語の基本語化の文脈においてみて、1953年から1982年までの一個人の訳業における外来語の基本語化の具体相を示した。抽象語彙の基本語化も見られたが、全体としては増加傾向にないものが訳に使用され、必ずしも全体の傾向に流されない点が見られた。

課題は、さらに多くの実践者に見られる漢詩訳の日本語を調査し、まずはこの言語使用・実践領域内において、個人の言語使用行為と日本語の変容との交渉を少しでも具体的に明らかにしていくことである。

## 注

- 1 武部利男の漢詩の翻訳については、自身が逐語訳で平板な散文がいいという主張をしている一方で、『白楽天詩集』のような定型詩訳も行なっていることに対して批判があったようである。しかし形式よりも内容を重視するという主張（武部1961ab,1980）は、読者にわかりやすくかつ正確な内容を伝えることが最上位だったと解釈できる。雅語使用と定型訳を採った『歴代詩選』の現代語訳批判をよく読むと、まず形式が先あってそれから内容を訳したあり方を批判していることがわかる。内容を訳してから、ある詩人の詩は場合によって定型になることもある・できるということを述べている。
- 2 武部（1950、1951）には李白の「山下独酌」の訳を載せるが、音読みをカタカナ、訓読みをひらがな

で訳したもので外来語はない。武部（1952）では「スタイル」（p. 47）、さらに武部（1968）では『玉台新詠集』「雑詩九」の一部の訳として「ベッドのうすぎぬのカーテンを照らす」（p. 61）が見られる。単行本から得た外来語の傾向と矛盾するものではない。

- 3 武部（1998）は武部（1982）『李白の夢』の末尾にある「『白楽天詩集』補遺」を収めており、この平凡社版を参考にした。また今回は漢詩訳を対象とし、共著の散文訳（三国志、紅樓夢）は対象としなかった。
- 4 高木他（1962）における白楽天の詩の訳では、かなの分かち書きは採用せず、李白の詩の訳と同じ散文的な訳となっている。しかしこうした形式の変更であっても、以下のように訳語「ガス」は維持されている。「新豊折臂翁」の七言「椒花落時瘴煙起」に対する訳文を以下に引用する。

サンショウの花の落ちるころ、わるいガスがわきおこる。 (p. 193)

また、白楽天の訳におけるカタカナ表記語は、表に示す典型的な外来語を除き、タイトルのみ見えるものも含め、地名・人名・書物名・施設名など中国のものも含めた外国の固有名詞の他に、動植物名に延べ362語使われている。

- 5 また表記上の動向としては、当用漢字表に定めるルールにしたがって、武部（1955）、武部（1957b）、武部（1958）、高木他（1962）では、外国の固有名詞（地名・人名）・動植物名・オノマトペ、さらに表外漢字相当語をカタカナ表記にしていた。しかし武部（1972）では、「ゴビ」「イラン」を除き、それらはカタカナ表記ではなくなっている。
- 6 ここでの「ボーイ」は「少年」ではなく「給仕をする男子」（奴子）の訳である。なお、原詩「梁園吟」に対して、この「ボーイ」という訳語は武部（1955）に早くから見えている（p. 184）。
- 7 金（2011）における増加傾向係数とは、国立国語研究所（1987: 65-66）にならって1950年から2000年までの『毎日新聞』（各年24日分）の記事を1950年から10年ごとに区切り、ある外来語が出現した場合、次の10年間の区切りごとにペアを作って比較を続け（1950年と1960年、1970年、1980年、1990年、2000年、次に1960年と1970年……）新>古ならば+1点、新<古ならば-1点として合計を出すものである。-15～+15が値の範囲である。
- 8 鄧（2013）の外来語調査によれば、武部利男の使用した外来語のうち、明治期からの外来語と思われるものとして「インスピレーション」「エクス」「ゲーム」「カーテン」「スタイル」の6語が該当する。

## 引用文献

- 石井 正彦（2008）「日本語学会2007年度春季大会シンポジウム報告 日本語の20世紀 4. 外来語の20世紀」『日本語の研究』4-1
- 一海 知義（1998）「解説—武部さんと白楽天」武部 利男編訳（1998）『白楽天詩集』
- 筧 文生（1981）『『白楽天詩集』解説』武部利男『白楽天詩集』六興出版
- 蔭山 達弥（2014）「中国のほんの話（63）武部利男『李白の夢』～漢詩の翻訳について～」『GAIDAI BIBLIOTHECA』203
- 樺島 忠夫（2004）『日本語探検—過去から未来へ』角川書店
- 金 愛蘭（2011）「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊3号
- 国立国語研究所（1987）『雑誌用語の変遷』秀英出版
- 国立国語研究所（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書

- 陣内 正敬 (2007) 『外来語の社会言語学 日本語のグローバルな考え方』世界思想社
- 陣内 正敬 (2012) 「外来語研究の意義」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』おうふう
- 高木正一・武部利男・高橋和巳 (1962) 『漢詩鑑賞入門』創元社
- 武部 利男 (1950, 1951) 「はるのシジン (抄)」『VIKING』24, 25 (本文は武部 1982 による)
- 武部 利男 (1952) 「リ・ハク (抄)」『VIKING』40 (本文は武部 1982 による)
- 武部 利男 (1955) 『李白小伝』新潮社
- 武部 利男 (1957a) 『白楽天詩集』東京創元社
- 武部 利男注 (1957b) 『中国詩人選集 7 李白 上』岩波書店
- 武部 利男注 (1958) 『中国詩人選集 8 李白 下』岩波書店
- 武部 利男 (1961a) 「漢詩の翻訳についての感想」『無限』8 (本文は武部 1982 による)
- 武部 利男 (1961b) 「『歴代詩選』評」『中国文学報』15 (本文は武部 1982 による)
- 武部 利男 (1968) 「『静夜思』について」『吉川博士退休記念中国文学論集』筑摩書房 (本文は武部 1982 による)
- 武部 利男訳 (1972) 『世界古典文学全集 27 李白』筑摩書房
- 武部 利男 (1973) 『中国詩文選 14 李白』筑摩書房
- 武部 利男 (1980) 「漢詩の翻訳おぼえがき」『文学』48-12 (本文は武部 1982 による)
- 武部 利男 (1981) 『白楽天詩集』六興出版
- 武部 利男 (1982) 『李白の夢』筑摩書房
- 武部 利男編訳 (1998) 『白楽天詩集』平凡社
- 丁 秋娜 (2012) 「李白の『静夜思』をめぐって —中国での本文と解釈を視野に入れて—」『早稲田教育評論』26-1
- 鄧 牧 (2013) 「大正期における外来語の増加に関する計量的分析」『国立国語研究所論集』6
- 西村富美子 (1982) 「[書評] 武部利男譯『白楽天詩集』」『中国文学報』34